

弘前市民参画センター 参画だより

No.50
2013.7.31
弘前市民参画センター

PICK UP!

男女共同参画の視点で読む
世界の格言・名言

ある人に合う靴も、
別の人には窮屈である。
あらゆるケースに適用する
人生の秘訣などない。

カール・グスタフ・ユング



弘前市民参画センター事業紹介「さんかくセミナー」ほか P 2・3

まなぼ「参画だより50号記念寄稿」 P 4

おとこの気持ち聞いたやいました「～習慣は抜けないが、頭の中は時代に追いつけ越せ～」 P 5

さんかくひとりごと「あるドラマの中から～息子と結婚する女性に語りかける母～」 P 5

ひと グループ
男女・団体紹介「子どもたちと仲良しになって、知らないうちにについてきたものは…」 P 6

利用者・利用団体紹介「青森県退職校長会中弘南黒支部」ほか P 7

本の紹介「男おひとりさま道」 P 8

市民参画センターからのお知らせ P 8



平成24年度第3回さんかくセミナー

3月26日、市民参画センターで平成24年度第3回さんかくセミナーを開催しました。

今回のセミナーは「ぼけても安心して暮らせる社会へ」と題し、講師の東谷康生さんが、高齢化が進む社会での認知症患者とその家族に対する支援の在り方について講演を行いました。

東谷さんは、弘前市内の特別養護老人ホームで生活相談員として勤務するほか、認知症患者と家族同士の交流や生活支援を図る「認知症の人と家族の会」の活動にも携わっています。

講演の中で東谷さんは、「認知症患者が安心して暮らせる社会をつくるためには、地域でできるだけ多くの人が認知症について正しい知識をつけ、社会全体で支

講演の中でも東谷さんは、「認知症患者が安心して暮らせる社会をつくるためには、地域でできるだけ多くの人が認知症について正しい知識をつけ、社会全体で支

えていくことが必要」と話し、市内に受講できるようになった認知症サポート講座の受講や、「介護は女性がやるもの」といった意識の見直しを呼びかけました。

講師の東谷さん

充実した日々について話す
関口さん（左）と三橋さん

介護経験者の話に聞き入る参加者

6月30日、「ひとにやさしい社会推進セミナー」を市民参画センターで開催しました。

今回は、弘前市で起業して活躍している関口恭子さんと三橋全子さんが、「逆境がチャンスに変わるスイッチ」をテーマに、事業を興したきっかけや自分らしい生き方の実現について話しました。

夫の失業をきっかけに、3年前から市の中心街で女性向けの古着店を営んでいる関口さんは、「起業のきっかけは良くないことだったが、始めてみると昔やりたかったことに似ていてことや、商売が自分に向いていることに気づいた」と発見があったことを明かしました。

弘前市役所を5年前に退職した三橋さんは、自宅のガレージを改装し、昨年6月に趣味を生かして花や雑貨を扱う店を開きました。三橋さんは「力仕事は大変だが、一日24時間では足りないくらい毎日が充実している」と笑顔で話しました。

自分の経験や夢を形にした事業を始め、「訪れる人に元気になつてもらいたい」と、生き生きと語る2人の様子を見て、出席した約30人は自分らしい生き方について考えていました。

自分らしい生き方の実現について
考える参加者たち

ひとにやさしい社会推進セミナー



気になる行動への対処について学ぶ
子育てサポーター

子育てサポーターには現在25人が登録し、子育て支援の活動を行っています。年に3回行う研修会はサポートの知識の向上を目的に、毎回さまざまなテーマで実施しています。

今回の研修会では、「発達が気になるお子さんの知つておいてほしいこと」と題し、特定非営利活動法人「光の岬福祉研究会」の工藤なほみさん、三浦勝弘さん、小山内俊也さんが、気になる行動をとる子どもの支援の仕方にについてサポーターにアドバイスしました。

工藤さんたちは、遊びから帰宅へなかなか移行できないなど、急な予定の変更に対応できないなど、時間の切り替えが苦手な子どもを例に、寸劇や施設で実際に使用して

いる道具を披露しながら、その場合の対応を紹介しました。

「時間の切り替えが苦手な子どもの場合、タイマーで帰る時間を設定したり、スケジュール表を作ることで、本人にも目で見えるようになると、言葉だけで伝えるよりも効果的」との具体的な説明に、出席したサポーターたちは熱心に聞き入っていました。

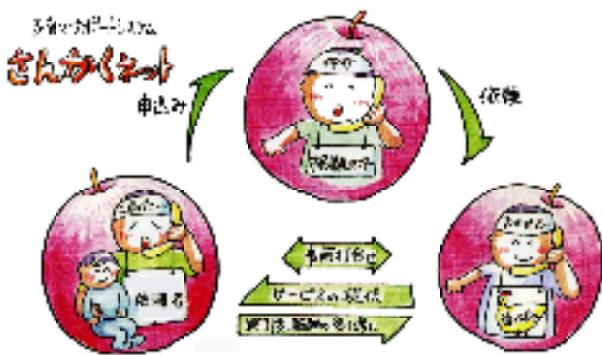
親が迎えに来ても帰りたがらない子どもや、長時間泣きわめく子どもへの対応についてサポーターから質問が出されると、講師の3人は「気になる行動の前後には必ずヒントがある。そのことを意識して普段から接していると、かかわり方の幅も広がってくると思う」「ちょっととした出来事でも大げさにほめてあげるとその子の自信になる」「これががあれば絶対にうまくいく、という方法はない。情報を蓄積して、いろいろな対処方法を準備しておくとよい」などと提案し、日頃から保護者と情報を共有したり、子どもの様子を注意深く見ていることが大事だと話しました。

「さんかくネット」では、市内に住む子育て中の家族を支援するため、保護者からの依頼に応じて、登録している子育てサポーターを紹介し、有償で自宅での一時預かりや催事での出張保育などに対応しています。

「さんかくネット」子育てサポーター研修会



(左から)
工藤さん、三浦さん、小山内さん



「さんかくネット」でできること

- 保育施設までの送迎(原則として公共交通の利用や徒歩)
- 保育施設の開始前・終了後の一時預かり
- 学校の放課後の一時預かり
- 冠婚葬祭・セミナー・催事などの出張保育など

サポーター登録・託児依頼の詳細については下記連絡先へお問い合わせください。

電話：0172-31-2501

(市民参画センター内)

まなぼ

おかげさまで『参画だより』は、
平成13年に第1号が発行されてから
今号で50号を迎えます

『参画だより』第50号に寄せて

弘前きらめき女性塾 第1期生 小山内則子

今から10年ほど前「足元の弱い女性に下駄を」履かせてくださるというので、その下駄をもらうのが楽しみだったのと、「男女共同参画」という耳に新しい響きにもひかれて『弘前きらめき女性塾』に入塾し、二年間通いました。

さまざまな視点から女性を(私を)取り巻く課題についての気づきや、解決の手段を教えていただきました。今も歯はだいぶ減ってはいますが、足元にかわいらしい下駄を履き続けております。

自分の考えの根拠となるものをしっかりと持ち、それを上手に伝え、発信できるようになりたい。それにはもっと世の中の仕組みがわかり、人を理解できなければいけないということが(少し成長したのか、私にも…)わかつてきました。

市民参画センター開設当初『参画だより』の発行を何度も手伝わせていただきました。私よりずっと先を行く女性たちの考え方や生き方に触れた感動は、今でも私の人生の糧となっています。

ひと ひと くらし 「女と男ささえあう社会」

市民参画センター 所長 櫻田 宏

平成8年春、「今度、女性行政を総合的に推進していくことになったから勉強してみてくれ」と課長から指示を受けた。弘前市では、国や県の婦人行動計画に対応するため、昭和57年4月に福祉事務所福祉課に女性問題を担当する係を設置し、福祉部門での組織改正を重ねながら女性に関する施策を展開してきた。そんな中、平成7年の第4回世界女性会議（北京会議）が大きな契機となり、市では、市全体で女性問題に取り組むため、企画課企画担当が総合調整をすることになったのである。

「そもそも女性問題でいいのだろうか」が始まりだった。国や県、先進都市の事例などを調べ、「女性問題ではない。特に“○○問題”というのが問題である。男女共生なのか男女共同参画なのか、参加ではなさそうだ。」と、頭を柔軟にし、これまでの縦軸の考え方から、横軸の考え方へ改め、試行錯誤の連続だった。

県が主催する会議では女性職員の出席が多かったが、その席上で、「女性行政は、部門ということではなく、行政のあらゆる分野に関わっており、弘前市では企画課で推進していくことになった。」と発言した。主催した県をはじめ出席者のほとんどは、福祉や民生、教育部門などであり、弘前市の新たな取り組みに期待する意見が相次いだ。

平成8年12月、庁内に「女性関連施策推進連絡会議」を設置し、建設部門や選挙管理委員会、消防事務組合も含めてすべての部から課長補佐、係長級の職員に出席してもらい、意見交換を繰り返した。なかなか理解してもらえず、会議では苦労したものの、次第に関心を持ってくれる職員も現ってきた。

初代「企画課男女共同参画担当主査」。新しい肩書きが付いたのは平成9年4月。弘前大学へ女性行政の現状等の調査・研究を委託するとともに、並行して世論調査を行い、当市の現状分析を進める一方、「弘前市男女共同参画推進懇談会」を設置し、市民からさまざまな意見を聴取したほか、意識啓発を目的にした講演会やワークショップなども開催した。

平成10年4月には企画課内に男女共同参画室が設置され、室長と二人三脚体制となった。毎週月曜日は弘前大学に通い、4～5時間、じっくりと議論を重ね、庁内に設置したプロジェクトチームの意見をもとに、平成11年3月、弘前市男女共同参画推進基本計画「女(ひと)と男(ひと)ささえあう社会(くらし)」を策定した。

基本計画を策定し、次は実施計画の策定と「弘前きらめき女性塾」の運営だ！と思っていたところ、平成11年4月の人事異動で秘書課へ異動となつた。輝かなくていい、一つひとつがきらめくことが大切。力が入り過ぎない方が自然体で長続きするはず。「きらめき」の名はこうして生まれた。あれから十数年。今、思いを新たにしている。

Q. 男女共同参画って知っていますか？

- A. 聞いたことはあるけど、内容はわからな
い。

Q. 家事は何かできますか？

- A. 何もしない…(少し考えて)。食後の自分
の茶碗は片付ける…かな!?

Q. パートナーと長く付き合うコツは？

- A. 二人で同じことをしない。相手は園芸が
趣味。自分は土いじりはしない。シティ
ボーカルだから(笑)。

Q. 男らしさ、女らしさをどう思いますか？

- A. 男らしさは「決断力」といった人がいた
な。女らしさは「我慢強さ」だろう。

Q. ボランティアでパソコンを教えています
が、男性と女性の教え方は違いますか？

- A. 違うね。男は同性だから気にしないが、
女性には言葉遣いに気をつかう。

Q. 友情について、男も女も変わりませんか？

- A. この年だから言える。男女の友情はない
というが、男も女も友情は変わらないと
思う。

おとこの気持ち



60代・無職・既婚

聞いて
いた
や
いき
し
た

インタビューを終えて

～習慣は抜けないが、
頭の中は時代に追いつけ追い越せ～

学校も職場も男ばかり。自分が40代近くなっ
て初めて女性の新入社員が入ってきた。「絶
対辞めさせるな」を合言葉に接したとか。パ
ソコンを教えているときの言葉の端々に、ぶつ
きらぼうではあるが柔らかさを感じるのは、
そのときの成果かな?だって教えられてる人
の顔がほころんでいるもの…。 梅



あるドラマの中から ～息子と結婚する女性に語りかける母～

なんとなく人生がむなしく思えて 誰のための人生なんだか
家事ばかりしてたら あっという間に還暦で
必死に育てた息子たちは 自分で育ったような顔を
鏡を見ると 誰かと思うほど年を取っている
人生って荒野のようにむなしいものなの
たまにそれに改めて気づかされるのよ
私を見てごらん 若いころは夢もあったし青春もあったのよ
将来のビジョンだってあったわ 結婚前はうまくいっていたのに
結婚してすぐに子どもができて その時から何もできなくなった
“私”という“個人”はそこで消えたの
嫁であり 母親であり 妻でしかない “私”はいないの
私の人生は子どものものになる 気がつけば ただのおばさん
この世に何の功績も残していない
あなたは自分の人生を生きて自分のために夢をかなえるのよ



ドラマの中のことではあるが、私自身も含めてこのような考えに
おそわれる女性たちは確かに存在する。結婚で人生が変わるのは
女性だけではないとは思うものの、女性の方がより多くの変化を
受けるのでは?そんな女性たちが結婚生活を送る娘や息子の妻を
理解し、サポートすることができれば、この世になにがしかの功
績を残せるのではと思った瞬間だ。

さんかく
ひとりごと



「子どもたちと仲良しになつて、知らないうちにについてきたものは…」

外崎宮子さん



豊田小学校交通整理員（緑のおばさん）として、毎日子どもたちを見守り学校に送り出している外崎宮子さん。

青少年育成委員・学校評議員・元PTA会長と、幅広い活動もされています。「子どもたちから元気をもらっている」という外崎さんにお話しを伺いました。

◆子どもたちとのつながり

『緑のおばさん』をして、今年で19年になります。青少年育成委員になつたのは、我が家のある子どもたちが県外の学校に行つてしまつたので、町内会から子ども会をお願いされ、軽い気持ちで主人と一緒に携わつたのです。それが育成委員とは知らないで（笑）。

◆活動の様子

春は新1年生に通学路や、通学のマナーも少しづつ教えます。夏は夏休みのラジオ体操と、子どもたちの見守り。秋は通学路



子ども会の行事
笑顔が集まりお昼ごはんも楽しい

品がユニークなので（嶽きみ・卵・玉ねぎ・袋ラーメン・バナナなど）、みんな『ヤツキとなつて』頑張ります。

朝早くから男性陣はテント張りや氷の買い出し。女性陣は豚汁とおにぎり作り。人集めが勝敗を左右するので、普段から子どもたちに声掛けをして、若いお父さんお母さんに来てもらいます。近頃の子どもは塾、部活動と忙しいので、集めるのは大変ですがそこは腕の見せ所です。

のゴミ拾い、町内の火の用心巡回、町会対抗運動会、子どもの祭典参加。冬はかるた大会。その他、町内会の納涼大会では、子ども向けの夜店の企画・実演と、一年中行事があります。

◆地域の中の男女共同参画

中でも、9月に行われる「地区町会対抗運動会」は、豊田地区各町会が運動公園陸上競技場に集まり、幼児からお年寄りまでが競い合い、町会の結束力が發揮される大運動会です。もちろん得点制で順位が決まり、賞

頒賞されるのです。子どもたちの行事には自然と父母が参加して、お年寄りが孫を見に来る。自分のお父さんお



児童公園での夜店祭りの様子

母さんでなくともかかわる。子どもの周りにはそのような環境が自然にできているのではないでしようか。

◆これからのこと

地域のお年寄りに活躍してもらい「古くてもこんなに良いものがある」ということを知らせたい。そして、何かの形でそれを残したいです。子どもたちが大人になって、それを思い出して「ふるさと」を感じくれたらと思っています。

昼食はテントの中で子どもたちとお父さんお母さん、おじいちゃんおばあちゃん、みんなで丸くなつて食べるおにぎりと豚汁。どこかのおばあさんが漬けた自慢の漬物。和やかさも加わりとても美味しそうです。この様子が大好きな光景で、だから頑張れるのです。

子どもたちの行事には自然と

《青森県退職校長会
中弘南黒支部》



第10回「あおもり教育の日」推進大会

子どもの健全育成をめざす地域活動

小中学校の校長を退職した人の会です。全国的な組織で県内には6支部あり、当支部には、現在中弘南黒管内在住の230名の会員がいます。会員の親睦と自己の研鑽を深め、生涯学習の推進と地域の教育振興を目的に、研修会やサークル活動、見学会、ボランティア活動を行っています。活動状況は年3回発行の「支部だより」に掲載して、会員相互の周知と理解を図っています。また、1年間の総括として、生涯学習実践例集「生きが

いを求めて」を発行し、会員の思いやライフワークの研究、創作文芸等を紹介しています。

平成24年度は支部創立30周年にあたり、記念事業が行われました。そのうえ、本会が主体となって進める「あおもり教育の日」推進大会が支部の担当で開催され、記念式典並びに祝賀会は5月1日の「弘前さくらまつり」期間中、来賓6名・出席者82名で、弘前パークホテルで開催されました。10月3日には、「私のソフトボーラ人生」という演題で、講師

に齋藤春香さん（前ソフトボーラ日本代表監督）を招いて、記念講演を行い、33名の会員が熱心に耳を傾けました。

また、創立から30年、先輩たちの足跡を記念誌としてまとめ、年度末ようやく発行しました。

第10回「あおもり教育の日」推進大会（中弘南黒大会）には、11月3日、東奥義塾高校の礼拝堂を会場に320余名の参加者が集まりました。弘前市の邦楽「鼓の会」、藤崎町の読書団体「わづこの会」、平川市の「少年少女発明クラブ」

が日常の取り組みについて発表し、運営には8団体の方々の協力を仰ぎました。

なお、『大人が変われば子どもが変わる。子どもが輝く郷土の未来』をスローガンに「あおもり教育の日」の賛同会員を募っています。関心のある方は、ぜひご連絡ください。

問い合わせ先

青森県退職校長会

〈電話〉 0172-34-5585

中弘南黒支部事務局

センター利用者に突撃インタビュー

40代・男性



◆センター利用目的と利用頻度は？

青森市から建築関係の仕事で来ていて、弘前市の学習センターや宮川交流センター、清水交流センターなどを利用していたのですが、施設職員から「参画センター」を紹介してもらいました。仕事の合間に読書のため、1週間に3日位の頻度で2か月前から来ています

◆センターの印象を教えてください。

第一印象は、2階フロアのいすの足に古くなったテニスボールを履かせていたことでした！どうしてもいすを引く時に音がして気になるのですが、細かいところに配慮されているのが良いですね。大変良いアイデアだと思います。

◆センターを利用した感想を教えてください。

駐車場が少ないと聞いていましたが、近くに有料駐車場がたくさんあり、インターネットが設置されている、飲食できる、時間を気にしなくても良い、など、利用しやすい所です。

◆「男女共同参画」についてどう思われますか？

一般に聞いたことはありますが、自分が意識してやっているということはないです。自分は建築関係の仕事をしていて女性が少ないですが、力仕事は男性が、管理職に女性がなっています。お互いにできるところをしていけたら良いですね。

◆センターに望むことと、ご自分の楽しみを教えてください。

フロアのスペースの関係上もあるのですが、強いて言えば本が少ないかなと思いました。自分の楽しみは、「読書」です。ゆったり落ち着けるこういう場所で「読書」をしていきたいです。

物静かに読書していらっしゃったところに突撃インタビューしたのですが、穏やかに答えてくださいました。施設内をよく観察していると思いましたが、センターを気に入ってくれているのがうれしかったです。また、弘前に来た時に寄りたいと言ってくれました。いつでもどうぞいらしてください。お待ちしていますよ。

by のん

市民参画センターからのお知らせ

★女性のための専門相談

日時：平成25年11月12日(火)14:00～16:00

平成26年3月11日(火)14:00～16:00

場所：弘前市民参画センター

内容：法律に関する問題について、弁護士
がアドバイスします。

※あらかじめ電話でご予約ください。ご予
約の際、弁護士への相談がスムーズにで
きるように相談員が相談内容をお伺いし
ます。

定員：3名（1人30分程度）

問い合わせ：アピオあおもり

(青森県男女共同参画センター相談室)

017-732-1022 (9:00～16:00 水曜定休)



●開館時間の変更

市民参画センターは、8月1日(木)～8月
4日(日)の4日間、ねぷた運行による交通
規制等のため、17時で閉館します。

●臨時休館

市民参画センターは8月26日(月)・27日(火)
の2日間、施設点検等のため休館します。

編集後記

7月27日、弘前駅前地区再開発ビル「ヒロロ」がオープンしました！3階の市の公共フロア「ヒロロスクエア」には子育てエリア、健康エリアなどがあり、コミュニケーションゾーンやイベントスペースでは市民団体やNPOのイベントも開催されます。これからも訪れる人々が楽しい時間を過ごしながら、体験・体感ができる施設であるようにと！
Mitz.M



弘前市民参画センター

〒036-8355 弘前市大字元寺町1番地13

TEL 0172-31-2500

FAX 0172-36-1822

開館時間 9:00～22:00

休館日 12月28日～1月3日

http://www.city.hirosaki.aomori.jp/gaiyo/shisetsu/kyouiku/htm_sankaku/framepage.htm

本の紹介

タイトル

「男おひとりさま道」

上野千鶴子
(株)法研 著
刊



～男おひとりさまへエール～

友人宅で「面白そうな本があるよ！」と手渡されたのが、この本「男おひとりさま道(どう)」である。第1章の「男がひとりになるとき」から第5章の「ひとりで死ねるか」まで、おひとりさまの運命をたどるかもしれない夫や兄弟のためにも、ぜひ読んでみようという思いが頭をもたげた。著者の上野さんは男性向けに書いたそうだが、男性たちだけに読ませておくにはもったいない。

女は「現役おひとりさま」か、将来の「おひとりさま予備軍」か、そのどちらかの自覚はあるが、男性はそのどちらにも入らないと思っている人が多そうとのこと。妻に看取られて、「おふたりさま」のうちにあの世へ送ってもらえると思っているらしい。もっと正確にいうと自分の老後のことなど考えていない人が多いらしい。しかし、死別シングル、離別シングル、非婚シングルと男おひとりさまは確実に増えている。

男おひとりさまが生きていけるように、いろいろな切り口の内容で、思わず笑っちゃうような部分もあれば、なるほどと妙に納得する部分もある。上野さんが取材した、充実した「男おひとりさま道」を生きている人たちも登場している。人生の下り坂を降りるスキルはたくさん持っていた方がいい。

特に「死」について書かれている最終章は興味深かった。おひとりさまはひとりでいることが苦痛でなく、それを選択した人のことだと位置づけ、「在宅ひとり死」の可能性が見えてきたとしている。ひとり死はひとりで生きてきた延長に、ひとりで死ぬことがあるだけとすんなり言い切っている。死ぬのは誰にも代わってもらえない、ひとりでなしひとげる事業だと言っているのが印象的だった。

by komori

